

日光東照宮における極彩色の検討

The examination of Gokusaishiki at Nikko Toshogu shrine

北嶋 秀子 Hideko Kitajima

文星芸術大学大学院芸術研究科
Bunsei University of Art

キーワード: 極彩色, 陽光的色彩, 建築思想, 日光東照宮
Keywords: Gokusaishiki, Color in the sunlight, Architectural ideas, Nikko Toshogu Shrine

1. はじめに

前稿¹⁾から引き続き, 日本の色彩美について検証する. 本稿では陽光的色彩美の核である極彩色についてスポットを当てたい. 極彩色を検証するに当たり, 現代の極彩色の意味では極彩色, 長い歴史の中で当時何と呼んだかは不明であるが, 現代では極彩色と呼ぶものを「極彩色」と表記し区別する.

2. 「極彩色」の「極」について

日本の建築彩色は, 飛鳥時代に寺院建築とともに中国・朝鮮半島からもたらされた. 古代の寺院建築は, 内部は暈縹彩色などの「極彩色」で彩られていたが, 外部は丹塗りの赤など単色塗りが一般的であった. 中世になり神社建築にまで装飾彩色が広がると, 建物の外部にも「極彩色」が使用されるようになる. 一般的には「極彩色」とは「極」の「彩色」と考えることができる. 「極」とは棟や梁のこと²⁾であり, それら建物の外部彩色が「極彩色」となった. それと前後するように極彩色ということばが生まれた, と筆者は考えている. 建物内部の「極彩色」は, 7世紀末の法隆寺金堂が最初と考えられるが, 現存する外部の「極彩色」については, 濱島による³⁾と唐招提寺金堂を除く(外部の彩色は建立当時のものかどうかは不明なため)と, 浄土寺多宝塔(広島・1329年)が最初だという. あと4年で室町時代を迎えるという鎌倉時代の末期であり, 筆者の仮説が正しければ, 室町時代のはじめの頃に極彩色ということばが生まれたことになる.

3. 極彩色と暈縹彩色

現代では, 極彩色とはきわめて濃厚な色彩の意味で使われることが多く, 横浜中華街・関帝廟の彩色などは極彩色と呼ばれる. 暈縹彩色⁴⁾とは, 同一色相で外側から内側へ次第に濃くグラデーションを成す彩色法で, 対比的に組み合わせた文様は多彩感と立体感を持つ. 極彩色の細部には多くの暈縹彩色が使われている. 日光の彩色職人の間では, 暈縹彩色を使った彩色を極彩色というほどである.

4. 文献上の極彩色

鎌倉時代中期の史料『二中歴』に仏像などの守るべき彩色技法として「紺丹緑紫」とあり, 寒色系と暖色系の色の組み合わせが示されている. 暈縹彩色はこれに習い, 紺の青と丹の赤, 緑と紫系の赤紫の組み合わせで美しい文様を作り出している. 現存する平等院鳳凰堂の堂内彩色の「極彩色」も日光東照宮の極彩色も暈縹彩色とは深いかかわりを持っている. 我々は色彩に関しては, 鳳凰堂も東照宮も極彩色であるという. しかし, 鳳凰堂が建てられた平安時代(1053年)には極彩色ということばはなかった可能性が高い.

934年頃成立した我が国最古の漢和对訳辞書である『和名類聚抄』から江戸時代末期までの17の古辞書と, 現代の12の辞典と5冊の色彩関係の文献, 計34冊で調べた結果, 極彩色の初出は天正10年(1582)の諏訪社上社神長官であった守矢家に伝来する『守矢文書』であると考えられる. 極彩色の文字は, 天正10年8月17日の日付がある「守矢頼真願文」にみられる. 「京・奈良之仏師を招下, 極さい色ニらんかん・きほうし・□祇候之会廊・女衆殿・はまいた・御かうし・左右之宝□所・護摩堂・奉経所・十六善神・内外平・大門・千度大□会廊・神事屋・舞台・経蔵・諸廊・車橋・鳥居・□外垣・玉垣可

色取,」とある。京都・奈良から専門家を招き,おそらくは当時の最高レベルの技術によって神社のいろいろな場所(この文書では,「らんかん」から「玉垣」まで)を濃厚に塗り重ね,彩るべしというのである。ここでの極彩色は,神社に付随する建築物であり,信仰の対象となるものである。建物外部に極彩色が使われるようになってからおおよそ250年で,都から離れた一地方である諏訪でさえ極彩色ということばが,一般的に使われるようになったということであろう。

江戸時代に入ると極彩色は,近松の浄瑠璃や式亭三馬の滑稽本の中にも見られ,対象が自然や人などにまで広がり,信仰の対象という意味合いが薄くなってきている。寺社建築の濃厚な装飾彩色を意味した極彩色が,江戸時代前期には濃厚な絵の具を用いた彩色法やそれによる色彩美,豪華なさまに変わり,そして江戸の後期から明治時代になると濃厚な彩色法や色彩美は金彩を含むようになり,派手な衣裳や厚化粧をも意味するようになった。

5. 現代の極彩色

それでは現代は,極彩色をどのような意味で使っているのだろうか。それを探るためには,極彩色や暈襖彩色によく使用された「紺丹緑紫」に当たる色を我々がどのように想像するのかを調べれば,おのずから極彩色のイメージが見えてくるだろう。それぞれの色の連想内容と,それらを統合した極彩色としての連想内容がまったく同じであるとは限らないが,一つの目安にはなるはずである。表1は極彩色に関わりうる色彩連想データの一部を,2冊の文献^{5) 6)}から引用したものである。

重要なのはイメージとして捉えられている抽象的連想である。抽象的連想を通覧すると,現代人は極彩色に暗,陰や負ではなく,明や陽であり正の印

表1. 極彩色に関わりうる色彩連想

色	具体的連想	抽象的連想
青	海, 空, 水	深い, 強い, 希望, 悠久, 清澄
赤	血, 太陽, 夏, 火, 口紅, りんご, イチゴ	明るい, あざやか, 情熱, 強烈, あつい
緑	葉, 自然, 草原, 草, カエル	平和, 安全, 希望, 新鮮, 明るい, さわやか
紫	すみれ, ブドウ, ラベンダー, 着物	高貴, 優雅, 大人っぽい

象を抱いていることが分かる。

6. おわりに

かつての「極彩色」や極彩色は,信仰と結びつき神々しさを含んだ色彩美の面が大であり,目に見えない仏や神の存在する空間を示す色であった。現代では,極彩色からきれい,強い,あざやかということばを連想するという調査結果もあり,少し意味合いが変わってきているようである。現代に生きる我々は,極彩色を信仰から切り離し,もっと我々の身近に引き寄せ,日常的な色彩美と考えているように思われる。

また,現代において日本画の技法としての極彩色は専門家間のことばである。そうではなく,一般的な極彩色を定義づけするとしたら,どのような定義であるべきか考察した結果,その定義は美的効果を含めて,以下のようにしたい。

- 1) 純色,またはそれに準ずる色によること。
- 2) 色の組み合わせは対比関係,またはそれに準ずること。
- 3) 色の輪郭が,はっきりしていること。

今後も「極彩色」の名称を探索していきたい。

参考文献

- 1) 拙稿, 日本的な配色を特色づける要因の検討, 文星芸術大学大学院研究科論集, 2006, Pp.1-20
- 2) 諸橋轍次, 大漢和辞典, 大修館書店, 1990
- 3) 濱島正士, 日本建築における色彩, 国立歴史民族博物館研究報告 62, 1995, Pp.217-231
- 4) 拙稿, グラデーションの美しさ評価における段数, 明度差, 彩度差の効果, 女子美術大学芸術学科紀要 5, 2005, Pp.26-34
- 5) 塚田敢, 色彩の美学, 紀伊國屋書店, 1995, p.132
- 6) 日本色彩研究所編, 色の百科事典, 丸善, 2005